



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第22号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2006年9月30日
 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
 Phone 0561-62-4111 EX 498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

IGWS 第22号ニュースレターの目次

- 第15回定例セミナー報告 1
- 第15回定例セミナー参加感想文 3
- 建築の場所論とジェンダー 4
- チェンマイ大学女性学センター訪問 5
- アジア女性フォーラム報告 6
- 新刊情報 7
- 次回定例セミナー報告
- 2006年度後期ジェンダー関連授業紹介 8

2006年7月7日（星が丘キャンパス）、7月14日（長久手キャンパス）の2日間にわたって、ジェンダー・女性学研究所第15回定例セミナー「宮崎駿アニメにみる日本のジェンダーの光と闇」を開催しました。以下はその概要です。

長久手・星が丘
 両キャンパス
 セミナー

講師 藤森かよ子氏（桃山学院大学文学部教授）



「宮崎駿アニメにみる日本のジェンダーの光と闇」

はじめに

宮崎アニメの批評的前提のひとつに、「アニミズムの復権」というものがある。本発表では、宮崎アニメが提示しているアニミズムの視座と女性像の関連を考察し、日本のジェンダーの可能性と危険を指摘したい。

宮崎アニメはいろいろあるが、ヒットしたのは「少女」もの

1984年の『風の谷のナウシカ』からはじまり、『天空の城ラピュタ』『火垂るの墓』『となりのトトロ』『魔女の宅急便』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』とヒット作を挙げると、すべて主人公は「少女」であり、しかもその「少女」は救世主としての少女＝守ってあげる少女である。実は、宮崎アニメにおける救世主としての少女像、もしくは闘う美少女像は、宮

崎アニメに固有のものではなく、日本のアニメの特徴でもある（『リボンの騎士』『セーラームーン』『サクラ大戦』『新世紀エヴァンゲリオン』『少女革命ウテナ』等々）。欧米や中国の神話、伝説、映画において、闘うのは成人女性であって、少女が闘うというテーマはあまり見当たらない。戦闘/救世主美少女像は日本の特徴なのである。

なぜ、宮崎アニメ（日本のアニメ）には救世主としての闘う美少女像がうまれるのか

段階的に推理してみよう。

●少女が闘って世界を守るという設定は、少女に守ってもらいたいという欲望を、製作者も聴衆も持っている→●幼児にとって守ってくれる対象は母→●戦闘/救世主美少女は母の力を持ち、守ってくれるが、母の支配力は持たない女なのではないか→

●日本人の母に依存したい欲望と、その反動・裏側でもある母への反発=母の断片化=心理的母殺しの欲望との矛盾を表象するのが戦闘/救世主美少女である。

戦闘/救世主美少女という女性像は、実は日本の伝統的女性像

日本の民話や童話には、「守られるお姫さま」ではなく、「守ってあげるお姫様」が多く登場している（『夕鶴』『雪女』『ヤマトタケルとオトタチバナヒメ』『安寿と厨子王』等々）。つまり、闘う美少女像は、新たにつくられたものではなく、以前から日本に存在した女性像なのである。アニメの闘う美少女は、日本人のジェンダーにフィットするからこそ造形されたのであり、ここに宮崎アニメのヒットした理由もある。

宮崎アニメが提示するアニミズムの視座と女性像

「守ってあげる少女」の基本にあるのは、「永遠に母なるもの」への憧れである。それはまた、「女神信仰」「地母神信仰」と重なる。「女神信仰」「地母神信仰」はアニミズムの心性から来ていることを考えると、現代日本アニメにある闘う美少女は、アニミズムの「女神信仰」「地母神信仰」の現代的俗化ヴァージョンであるといえる。

日本のジェンダーの光と闇

〈日本のジェンダーの光〉

日本の女性たちは、日本の精神風土に根深くあるアニミズム的「女神信仰」によって「女性=人に尽くす愛の存在」として規定され、その規定を内面化して、その期待にある程度応えてきたため尊敬されてきた。また、そのことから女性は男性よりもはるかに道徳的な善良な存在として想定されている。

〈日本のジェンダーの闇〉

日本の男女のありようは「依存したがるくせに威張る男」と「おかあちゃん」という擬似親子関係になっており、対等な男女間の恋愛が存在しない。日本の女性は私的領域における自身の影響力に依存するあまり自分の生を存分に生き切ることには挑戦しない。一方、日本の男性は公的領域で優位に立つことを期待されるあまりに、私的領域を疎かにする。

おわりに～日本のジェンダーの光と闇を超えて・皆さんへのメッセージ

女性の皆さんへ：皆さんは、ご自分で思っているよりは、はるかに強い影響力がある。矮小な計算や打算などせずに、「雄雄しく」生きてほしい。

男性の皆さんへ：女の精神力に守ってもらいたい欲望を認めるのは「弱さ」ではない。女をきちんと尊敬せずに、まともに扱わないことによって生じる損失は大きいことを自覚してほしい。

（文責 IGWS 運営委員石田好江）



〈星が丘キャンパス〉



〈長久手キャンパス〉

第15回定例セミナー

参加感想文

竹内祐美子

今回の講演会のテーマが「宮崎駿アニメにみるジェンダー」ということを知ったとき、こんな講演会を待っていたと喜んだ。宮崎駿監督の作品は、幼い頃から慣れ親しんできた大好きなアニメーションだ。しかし私は、宮崎駿アニメに登場する女の子がどうしても好きになれなかった。真っ直ぐで慈愛に満ちていて、最終的には世界まで救ってしまうなんて、こんな女の子はあり得ない！！今回を通して、宮崎駿アニメに対する疑問が解けるのではないかと心待ちにしていた。藤森先生の講演会は、私のこうした疑問にこたえ、宮崎駿アニメについての理解を深めさせてくれるだけでなく、女性の生き方についても考えさせてくれるものだった。

何よりもまず圧倒させられたのは、藤森先生ご本人だ。話し方から内容までパワーに満ちあふれていて、すっかりお話に聞き入ってしまった。宮崎駿アニメ以外でも多く見かけるようになった「戦闘美少女」は、日本のアニミズムの女性観が関係していると藤森先

生は言う。私はてっきり新しいからウケているのだと思っていたのだが、オトタチバナヒメや『もののけ姫』などの映像の一部を例にとって見ると、そのことにとっても説得力があった。今まで無意識に見てきた作品を、そういう目で見るとよりおもしろくなると思った。「守るお姫さま」は本当に美しい。しかし、女性に「懐かしい優しいおかあさん」を求めつつ、姿は美少女でなければいけないなんて、男性にとってなんて都合の良い話なのだろう。

今回の講演会では、女性の中に秘められている圧倒的なパワーを再確認することができた。もっと女性が普段の社会からその力を自覚すれば、セクハラなんて無くなるんだろうなぁと思う。女性の地位が少しずつ認められてきてはいるが、それはあくまで男性中心社会の中での活躍が前提とされている。女性自身も会社の中で「職場のおかあさん」に甘んじていないで、もっと頑張らなくてはいけないのではないだろうか。

(本学現代社会学部3年)

成田 和美

私がこの講演に参加しようと思った理由は、まず宮崎駿アニメが大好きだったこと、そして宮崎駿アニメは、少女を主人公にした作品が多いと感じていたので、その理由が知りたかったからです。

藤森先生の講演は、宮崎駿アニメにおけるジェンダーと、それに関係した日本のジェンダーの構造について扱っていました。「なぜ宮崎駿アニメ（日本のアニメ）の中で、戦う少女、救世主としての少女が描かれているのか」について、先生の推論で印象的だったのは、「母」という存在の意味でした。「戦う人」「救世主」という言葉を聞くと、男性を想像しがちです。しかし、それが女性であることによって、「守って欲しいけれど、支配はしないで欲しい」という、母を求めつつ母を恐れる心、いいかえれば、美少女に母性を求めてしまう日本人男性の心情を表しているということでした。さらにこの考えは、新しく生まれたものではなくて、昔からあったのではないかという話でした。ただ、日本の童話を思い出すと、男性（少年）が「戦う人」「救世主」としての役割を持っていることが多いのではないだろうか、と疑問に思う部分もありました。

日本のジェンダーの「光」は、私的領域での女性の強さと、女性は善良な存在だというイメージが想定されていることだそうです。一方の「闇」は、女性が私的領域の強さに依存するあまり、公的領域と私的領域の両面で充実させようとしないうことであり、反対に男性は公的領域で女性より優位に立つことを期待されるため、私的領域をおろそかにする、ということでした。現在では、以前よりも女性が公的領域で活躍する場面は増えてきていると思いますが、私的領域での女性>男性、公的領域での女性<男性という構図は残っていると思います。

この講義に参加して感じたことは、女性をもっと公的領域において積極的になるべきだということです。私たちが感じている以上に、女性というのは影響力があります。これからの日本では、ますます企業や社会において女性の力は大きなものになるでしょう。公的領域でも、女性は男性から頼られるようになるために、しっかり自分の意志を持たなければいけないと思いました。

(本学文化創造学部3年)

建築の場所論とジェンダー

垂井 洋蔵

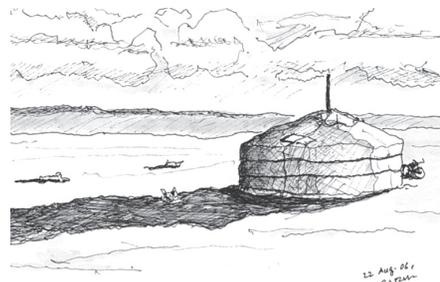


左側が著者

女性学研究所のニュースレターに相応しいテーマということで、8月後半現代社会学部の藤井先生主催のモンゴル研修旅行に同行し体験した、遊牧民のゲルと呼ばれるテント住居の話を中心に、建築に関連した、男女の場所の区分について書いてみます。中央アジアの羊遊牧民のテント住居内部の場所秩序に見られる、明確な男女区分は、建築の場所論の世界では有名な話題です。常に引用される資料は、19世紀末に、W. Radloff という民俗学者がアルタイ人の住居について報告した内部の図です。ほとんどいつも同じ図が多くの本に引用されています。それによると円形のテントの入り口から見て（大事な事は奥から見ると左右が反対という事なのですが）、右側半分が女性の、左側半分が男性の領域とはっきり分けられているというものです。こうした秩序はモンゴルのゲルを含む中央アジアのテント住居に共通したものだと言われています。右側に調理や乳の加工、裁縫などの道具が置かれ、女性の領域になり、狩りの道具の置かれる左側が男性と言う訳です。それが住居内で来客も含め人々の座る位置にも厳密に守られていたというのです。日本で言えば結婚式の披露宴で、新婦側の来賓の席が奥から見て左側と言うのと共通していて興味深いところです。こうした秩序が今は実際どうなのかということが今回の旅行で調査したかったテーマでした。私の泊めてもらった、遊牧民ボヤさんの夫婦と二人の子供が暮らすゲルは直径5メートル位の普通の大きさの住まいでした。もちろん昔の資料のような炉ではなく、煙突のある薪ストーブがほぼ中央におかれ、大きな鍋を置いて調理やミルクからヨーグルトを作る加熱もその上でやっていました。ゲルの屋根に小さなソーラーパネルをくり着けて、夜間の小さな照明一つと、旧式の白黒テレビの電源に使っていました。ボヤさん宅に限らずたいいのゲルは、入り口から見て左右両側に一つづつベッドがあり、昼間は腰掛けとして使われます。昔の資料では一番奥の一つだけ低いベッドがあり主人の場所であると記されています。実際は入って右側のベッドが女性用だというわけではなく、来客である私は夜右側のベッドに寝かされ、夫婦は中央の床に並んで寝て、左側のベッドは8歳位の長男が寝ました。男女の領域は例の資料とは大分違うようでした。ただ漠然とした場所の秩序が残っている事も感じました。入り口のすぐ右に、調理の道具が置かれ、ヨーグルトの

入った桶があります。ですから良く観察すると奥さんはゲルの中ではほぼ常にそのあたり、つまり入って右側あたりにいます。肉を切ったり粉を延ばしたり、次男をあやすのも、右側のベッドに腰掛けてやっていました。それに対して主人はたいい奥の床に座っていました。ボヤさんの第二人が来て一緒に酒を飲む時にはボヤさんが一番奥の床に、乗馬用の鞍を背にして座り、その右、つまり入り口から見て左奥に私が座らされ、私の右隣に顔なじみになっていた下の弟が座りましたが、酒を飲む時にどうも居心地が悪い感じで、ボヤさんの左側（入り口から見て右側の）ベッドに移動して座りました。酒は一つのコップで常に主人が起点になって勧めるので、座る順序が逆だとやりにくかったのでしょう。入り口からみて最奥の左側には馬具が飾られており、昔の資料と同じでした。ちなみにテレビも奥の左側に置かれていたので夜、姪の女の子達が来た時はその辺りに集まります。こうして見るとゲル内の男女の領域の区別は当時もヨーロッパからやってきた民俗学者が資料に残したような記号的な物ではなかったのではないかと言う疑問が浮かんできます。入り口を入ってすぐ右に調理用の道具が置かれるのは作業上の都合なのかもしれませんが、その対角線上に価値の高い立派な鞍や飾りが置かれたのは、日常と非日常の対極の表現として解釈できます。住居内の作業による男女の居場所の違いという程度のものであったのかもしれませんが。時代は違いますが、少なくとも現在のゲルの暮らしを観察して私はかつてのヨーロッパの民俗学者の言うような性による住居内の場所秩序とは違う構造を感じました。入り口を入って左に着替えを入れる棚があり、その扉に付いた鏡の前に座ってボヤさんの奥さんは朝お化粧をしていました。左側は本来男の領域ですよ。

(本学現代社会学部 教授)



垂井氏自筆

チェンマイ大学女性学センター訪問

平林 美都子

2006年8月20日から26日まで、文化創造研究科長、皆川先生とともに、タイのチェンマイ大学社会科学部を訪問した。当社会科学部と国際交流専攻との学術交流の一環として、本年2月と7月にサイチャン副学部長およびセクスン学部長が来校、講演された。今回はその返礼として、当社会科学部において特別講義を行なうのが主なる目的だった。この機会を利用して、かねがね名前を聞いていたチェンマイ大学女性学センターを訪問した。以下、チェンマイ大学女性学センターについて簡単に紹介してみたい。

チェンマイ大学の女性学センターの始まりは、当大学の社会科学部の教員たちが女性学研究プログラムを立ち上げた20年前に遡る。その後1993年には、タイではじめての女性学センターが設立され、社会科学部に属する独立した組織となった。この女性学センターは、リサーチと市民への啓発活動の双方に重点を置いている。女性学修士号のプログラムをタイで最初に立ち上げたのも、このセンターである。

女性学研究の修士号取得のためには、12単位の必修科目（女性学批評、フェミニズム哲学、比較女性学、タイの女性運動）と18単位の選択科目（政治・法律系、人類学・社会学・経済学系、人文学系、科学・健康・産む権利系の社会学系の四コースから二コースを選択）を取ることが必要である。12単位の修士論文は、インターンシップと研究レポートで代えることもできる。

女性学センターは、このような研究プログラムでセンターの中心メンバーとなる若手研究者を育てている一方、他方で実践的なプログラムも提供している。それが、NGOで働く人々のためのフェミニズム・リサーチ訓練、そして、北部地方で働く女性リーダーのための法律知識を習得するプログラムである。市民に対するこうした教育活動は、チェンマイ大学が貧困な住民の多い東北部に近いという立地条件を考えると、必然的なことだと思われる。貧困が原因となる売春やそれに伴うエイズの問題は、タイにとり深刻な課題となっている。売春、エイズのフィールド調査のために、このセンターに所属して研究する外国人留学生もいる。私の講義を聞きにきてくれた人の中に、二人の日本人女性がいた。一人はセンターの女性学で修士号を終えた人、もう一人は、売春の研究のために社会科学部に所属して博士号取得をめざしている人だった（現在、センターにはまだ博士号コースがない）。

また、この女性学センターの図書の蔵書の多さにも、

正直、驚かされた。女性学に関してタイの一番の情報センターと誇るだけあって、13000冊の蔵書、タイで出版される女性学関連のニューズレターの収集、東北部のエイズに関する年毎のクリッピング、世界各地の女性学組織からの資料などが閲覧できるようになっている。書物やニューズレターの多くは英語である。センターには専任の研究員が10名ほどいる。その大半が英語圏の国で学位を取得しているということだ。センター独自の出版物も英語で書かれたものが多かった。外国からの研究生がリサーチを行なえるのも、英語の文献が豊富にあり、英語でのコミュニケーションが可能だからだろう。

今回、センター独自の出版物を数冊入手してきたので、興味のある方は、愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所にてごらんになっていただきたい。

入手図書：Nithi Aeusrivongse, *Talk About Sexuality in Thailand: Notions, Identity, Gender Bias, Women, Gay, Sex Education and Lust*. 2004.

Virada Somswasdi and Alycia Nicholas, eds., *A Collection of Articles on Lesbians and Lesbianism in Thailand*. 2004.

Usamard Siampukdee ed., *Contemporary Global Issues in Social Sciences*. 2005.

Virada Somswasde and Sally Theobald, eds, *Women, Gender Relations and Development in Thai Society*, Vol. I and II. 1997.

（本学文化創造学部 教授）



右側が著者



第6回東アジア女性フォーラム北京会議報告

～民間組織国際会議の意義は？～

國信 潤子

2006年7月18日から20日の間、「NGO」による第6回東アジア女性フォーラムが「政府直轄組織」の中華婦女連合会主催によって、北京の人民パレスホテルで300人ほどの参加者を得て、開催された。NGO、つまり民間組織による会議ではあるが、今回は中華婦女連合会という中国政府組織が主催したところに、多種多様な問題が準備段階から生じた。そもそも東アジア女性フォーラムは1994年に国連世界女性会議の準備過程で東アジア女性の声を国際的にも聞こえるものにしようという意図で、その国連世界女性北京会議(1995年)準備会議(アンゴラで開催)出席の東アジア女性有志の合意のもとで、故松井やよりさん等の努力により、第一回目が1994年に日本の神奈川県女性センターで開催されたことに始まる。その後、韓国、モンゴル、台湾、香港で民間女性組織の団結によって開催されてきた。さらに定期化され2-3年ごとに東アジア諸国をめぐる、今回一周目の最後として中国開催の番となった。今回の日本の連絡人は城西国際大学ジェンダー・女性学研究所教授 魚住教授であった。

当初から予想されたとおり、問題の多い会議であった。民間女性組織の国際会議であるこの東アジア女性フォーラムが中国政府直轄の中華婦女連合会によって盛大に開催されたことは、中国の実情を功罪両面でよく反映している。良い点として準備は万端、費用が十分かけられた会議であり、参加者も中国全域の婦女連リーダーが出席した。さらに交流会は人民大会堂で開催された。また初めて北朝鮮政府の女性が3名出席した。問題点としてテーマなど全てはトップからの決定を実施するのみで、会議のテーマ、分科会報告者さらに中国国内・関連地区からの出席者もトップからの指名であり、香港、マカオのSAR(特別行政区地域)そして台湾からもすべて北京側に親密な組織からの指名参加者が決定されていた。従って台湾の従来の女性組織は皆参加をボイコットし、香港では民間組織が意図的に排除された。このことについて開催国以外の民間組織の連絡人は一切異議申し立てできなかった。

このように準備過程から問題含みの会議であり、テーマも経済発展中心であった。テーマは「持続可能な開発とジェンダー平等」であり、3つの分科会は「意思決定と組織管理への女性の平等な参画」、「経済開発における女性の平等な参加・参画」そして「女性の能力開発のための平等な社会環境の創造」というものであった。このテーマ選択も中国側からの一方的提案を鵜呑みにしたもので、女性への暴力防止、平和維持、障害を持つ女性の問題、人身売買、軍事基地問題など

従来東アジア女性フォーラムには必ずあった多くのテーマは取り上げる枠も時間もないという状況であったが北京の街の急速な都市化には目を見張るものがある。また都市部女性に活躍も職域も広がり、経営者としての女性が急増している。「成功した女性」が自信をもって発言していたことは、成果として評価されるべきであろう。中国からの報告はおしなべて中国の急速な経済発展によっていかに生活が豊かになったか、地域の女性が組織のリーダーとしていかに成功を納めたかの報告に終始した。経済発展から得たものは大きいことは確かであるが……。北京の街の急速な都市化は目を見張るものがある。また都市部女性に活躍も職域も広がり、経営者としての女性が急増している。「成功した女性」が自信をもって発言していたことは、成果として評価されるべきであろう。

会議の直前になって、参加5カ国・地域の連絡人どうしが連絡もできないまま、テーマ、報告者が決定されていたことが問題点として指摘され、日本側としてその過程に問題指摘できなかったという問題が残った。内容という点では密度の薄い会議であったが、見方を変えれば中国の国内事情が見えてきた会議ではあった。

日本からは全体会報告に昭和女子大学の坂東真理子教授、分科会報告者の6人のうちの一人として私は、日本女性の社会的地位が経済成長に応じて改善されていない実態、格差の拡大、労働時間の延長とサービス労働化、家庭内役割が女性に過重にかかっている実態を指摘し、地域における女性家事労働評価手法としての地域マネーの道を提案した。

最終日に宣言文採択をするために宣言文起草委員会が設けられ、私も元お茶の水女子大学教授の原ひろ子さんとともに委員会で他国20人ほどの委員と宣言文作成の議論をした。その過程で中華婦女連が平和維持問題、軍事力拡大批判、国連諸関連国際機関との連携、さらに経済発展が女性に否定的影響のある側面を論じることを忌避しているということを私は感じた。

次回の東アジア女性フォーラムは2009年7月に日本で開催される予定である。城西国際大学ジェンダー・女性学研究所が受け入れ組織となる。今後民間女性組織国際会議がより広い市民諸層からの声を十分聞き取りながら、それらの問題を国際的議論の俎上に載せていく道として、このフォーラムの存在意義は今後もさらに大きくなると考える。

(本学ビジネス学部 教授)

新刊情報



ジェンダー・女性学研究所では、毎月ジェンダー関連の書籍を購入しています。本年度前期に購入いたしました書籍の一部をご紹介します。学生、研究者のみならず一般の方にも閲覧、貸し出しが可能ですので、どうぞご利用下さい。また、現在研究所所蔵書籍を当研究所のホームページより検索できるように作業を進めています。メディア、文学、労働、開発、国際協力などのキーワードからジェンダー関連書籍にアクセスできるようになります。資料検索などにお役立てください。

- 河合欄『未妊―「産む」と決められない』（2006, 日本放送出版会）
- 白波瀬佐和子『少子高齢社会の見えない格差―ジェンダー・世代・階層のゆくえ』（2005, 東京大学出版会）
- 金子雅臣『壊れる男たち―セクハラはなぜ繰り返されるのか』（2006, 岩波書店）
- シンシア・エンロー著、上野千鶴子訳『策略―女性を軍事化する国際政治』（2006, 岩波書店）
- 阿部潔、難波功士『メディア文化を読み解く技法―カルチュラル・スタディーズ・ジャパン』（2004, 世界思想社）
- 神戸女学院大学石川康宏ゼミナール『「慰安婦」と出会った女子大生たち』（2006, 新日本社）
- 野口啓子、山口ヨシ子『アメリカ文学にみる女性と仕事―ハウスキーパー・カラーワーキングガールまで』（2006, 彩流社）
- 平林美都子『表象としての母性』（2006, ミネルヴァ書房）
- 岡真理『褒椰子の木陰で―第三世界フェミニズムと文学の力』（2006, 青土社）
- 女性労働問題研究会『貧困と疲弊―女性労働のいま』（2006, 青木書店）
- 青野篤子他編『フェミニスト心理学をめざして』（2006, かもがわ出版）

11月中旬に、ホームページのリニューアルと図書検索システムの稼働を予定しています。ご期待下さい。

ジェンダー・女性学研究所主催

第16回定例セミナーのお知らせ

ドメスティック・バイオレンス（DV）の実態と被害者支援の現状 DVの加害者にも、被害者にもならないために

親密な関係における暴力である“DV”。DV法の施行により国や自治体はDV対策を進めてきていますが、内閣府の調査でも3人に1人の女性がDVを受けた経験があると答えており、DVは未だに、『身近』でかつ『深刻』な問題です。

DVの当事者にならないためにも、一度、DVの実態と被害者支援の現状について学んでみませんか。

講 師

可 児 康 則 氏（名古屋第一法律事務所弁護士）

日時&場所

11月 8日（水）13時20分～14時50分 於・長久手キャンパス

11月30日（木）10時50分～12時20分 於・星が丘キャンパス

参加無料でどなたでも聴講できます。

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人でも受講できます)

〈2006年度後期〉

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ビジネスとジェンダーⅡ

長久手

講師 / 北仲千里

【授業の概要】

産業社会におけるビジネス行為はジェンダー：社会・文化的性によってその役割、評価、影響などが異なる場合がある。特に日本社会においては女性の経済的地位はまだ脆弱であり、雇用機会均等法の実施も不十分である。近年の経済のグローバル化のなかで職域、職階、賃金のジェンダー格差にどのような変化が見られるかについて統計データから考察する。また、産業界における人間関係についてジェンダーに敏感な視点をもって考察する。さらに職場の人間関係における問題、賃金格差、地位格差、セクシュアルハラスメント訴訟などについて、その内容について詳細に検討し、今後を展望する。

比較文化論

長久手

講師 / 星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の文化について触れる機会が多くなってきた。この授業では、さまざまな文化を考察する上で必要な概念について学ぶことによって、世界の文化の特徴について考える。さらに、異文化交流についても講義する。

その際、民族、国家、南北問題、ジェンダー等といったさまざまな視点から文化について考える。とくに、イスラームの文化の事例も授業のなかで取り上げる。

女性学・男性学

長久手・星が丘

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

ジェンダーと社会Ⅰ

長久手

講師 / 國信潤子、星山幸子、佐藤 光、林かぐみ、生江 明

【授業の概要】

この講義は、まずジェンダーとは何かについて解説し、それらが日本社会において、また開発途上国においてどのように現象化しているかを紹介するオムニバス講座である。5名の開発協力の現場で活躍する講師によって日本、トルコ、バングラデシュ、ネパールなどでの現場の開発協力活動を基礎にジェンダー関係の多様性と開発協力におけるジェンダーに敏感な視点とは何かを紹介する。

持続可能な開発、基本的な生活ニーズの確保、参加型開発、地域住民の意識化など、近年の開発論の理論的展開をもとにジェンダー関係の変容を考察する。

ジェンダー論

長久手

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

近年、公的文書などにもジェンダー(gender)ということばが頻繁に使われるようになってきた。それは社会・文化的性別という意味である。つまり、社会的に期待される役割、意識、行動様式などの性別区分を指す。従来の固定的性別分業とは異なり、個性的な新たな社会的役割行動様式をとる青年たちが増加してきている。このような社会変容の背景、法制度の改革などを紹介する。統計データから変化を実証する。また固定的な男らしさや女らしさをこえて個性の発揮が今後重要である。男女ともに少子高齢社会を支えるために、家事・育児・介護における責任を遂行し、労働により経済自立し、地域活動を行える適正ミックス社会を展望する。

ジェンダーと社会Ⅰ

星が丘

講師 / 北仲千里

【授業の概要】

男らしさ、女らしさは最近大きく変わってきています。しかし、現在でも人生の始まりから最後まで、雨が降った時さす傘の色からくしゃみの大きさまで、その人の性別によって大きな違いが出てしまうことも事実です。また、男女の差異と平等は、今日大きな社会問題にもなっています。この講義では、社会的な見方をベースに「男であること、女であること」や家族、そしてセクシュアリティにまつわるテーマを考えていきます。

ジェンダーと社会Ⅱ

長久手

講師 / 中島美幸、山下智恵子

【授業の概要】

ジェンダーの観点から文学作品を分析することによって、〈女/男〉の規範がどのようにテキストにおりこまれているかを読み解き、さらにテキストがどれほど現実の女と男の生と性を規定してきたかを検証する。

(中島美幸兼任講師) 「女性の表現」の観点から日本文学を歴史的に跡づける。特に近代以降の女性表現については外国の女性文学と比較しつつ読み解いていく。

(山下智恵子兼任講師) 現代の文学作品を中心に、家族、母娘などの人間関係を、ジェンダーの視点から検証する。

フェミニズム概論

星が丘

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

よりよい社会を形成する一助とするために、女性と男性のあり方とさまざまな問題点を学ぶ。

これらの講座履修・申し込み先

愛知淑徳大学エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋千種区桜が丘23

受付日時 (月～金) 9:00～17:00

TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)

ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

今や日本のアニメは、“ジャパニメーション”という呼称で象徴されるほど世界で評価を受けています。今回の定例セミナーは、その重鎮ともいえる宮崎駿のアニメの世界を手がかりに、日本の社会のジェンダー観を浮き彫りにするご講演でした。メディアの語るものへの関心を向けるようになったという学生の感想には、セミナーの効果が見えます。なお当研究所では11月中旬に、ホームページのリニューアルと図書検索システムの稼働を予定しています。どうぞご期待ください。(高橋)

ASU・IGWS2006年度

運営委員

石田好江(所長兼)、岡澤和世、
國信潤子、斎藤和志、西 和久、
平林美都子

事務担当

高橋博子